

古典教育のすじみちを考える

大阪教育大学

田中 俊弥

一 古典教育はどこにあるのか

現行の小学校の国語教科書には、韻文として万葉集や古今集の歌、芭蕉、蕪村、一茶の句などが掲載されている。教科書によっては、「竹取物語（冒頭）」「百人一首」「枕草子（春はあけぼの）」「平家物語（冒頭）」「論語」「狂言」などの本文が掲載され、なかには、「桃源郷ものがたり」として陶淵明の「桃花源記」が松井直の再話のかたちで載せられているものもある。

国語教育のなかの古典教育においては、「過去の長い年月に亘って、多くの人に尊重され、愛好されてきた文献」（時枝誠記）、すなわち古文としての日本の古典文学や漢詩文としての中国の古典文学がその対象となっており、その学習活動においては、その本文を「声に出して読むこと」が重視されている。その際、基本となっているのは、古文や漢文に親しみ、

作品そのものを理解するという作品主義という考え方である。

子どもたちにとって、古文や漢文（訓読文）の言いまわし、いわゆる文語文の表現は、耳慣れないことば、「むかしの人のことば」であり、違和感をもたれることが少なくない。もちろん、その独特の韻律に興味や関心をおぼえるということもあるが、一般的には、意味のわからない世界として遠ざけられているというのが実情ではないだろうか。

わたしたち教員は、『源氏物語』や『史記』をはじめ、日本の古典文学にゆかりのある、数々の名だたる作品を読んで欲しいと願っている。しかも、それを訳文ではなく、その当時のことばとおして理解してほしいと望んでいる。それは、現実的には、大学入試に古文や漢文が出題されるので、古文や漢文を原文にちかいかたちで読み解く力をつけてほしいと願っているためでもある。

それならば、国語教育における古典教育は、大学入試のためにあるのかということになる。そのことはあながちに否定しがたい現実ではあるが、一方でそれは、一面的にすぎるといふふうにもおもっている。やはり、もっと古典文学の世界にふれ、親しみ、生涯にわたって古典文学を愛好するようになってほしいとおもっているし、日本語の力をゆたかにするために古典を大事にしてほしいとおもっている。

二 古典教育は何をめざすのか

「うさぎとかめ」の話は、幼い子どもにもなじみのある話である。しかし、これが、古代ギリシア人・イソップ（アイソポス）のつくったお話であることを知る人は少ないかもしれない。ましてや、この話がいつ日本にもたらされたのかを知る人はもっと少ないかもしれない。いわゆる『イソップ寓話集』は、いまから四百年以上前に、キリシタンの徒によってもたらされ、江戸時代には『伊曾保物語』として広く親しまれるようになったのである。「北風と太陽」の話や肉をくわえた犬が川面に映った自分の姿をみて肉を失う話など、数々のお話がいまも子どもたちの読み物となっている。

イソップのお話を読むことは、それを学習

の対象とすることは、はたして古典教育なのか。中学校では、「虎の威を借る狐」の故事や「株を守る」話などが教材化されており、それは古典教育の範疇のなかで扱われているわけであるが、義務教育段階でイソップの話が古典教育の対象としてとりあげられることはあまりない。それならば、江戸時代の『伊曾保物語』を当時出版された本文のかたち(版本)で読めば古典教育になるのか。わたしたち教師は、そのところをもう一度、問い直してみる必要があるのではないか。

「なよたけのかぐや姫」の話すなわち『竹取物語』は、『源氏物語』のなかでは、「物語のいではじめの祖」(総合)と評価され、長い間にわたって読まれてきた作品ではあるが、その原本の所在は不明である。『源氏物語』にしても、紫式部の自筆本は見つかっていない。したがって、古典文学作品を本文そのものに即して読むということは、よほどの専門家にとっても実は至難のわざなのである。しかしながら、わたしたちは、『竹取物語』がおもしろい話であり、すぐれた文学であることを知っているし、さまざまなかたちで、いまも子どもたちにも親しまれているわけである。古典教育の対象とされる文学が、古文だから漢文だから、古典教育が成立しているのではない。イギリスの国語教育において、シェ

イクスピア作品は、不動の地位をしめ、繰り返し読まれ、こよなく大事にされている。古典の古典たるゆえんは、古い時代のものであっても、時代をこえて、その作品が繰り返し読まれるということであり、そこに読者が汲めど尽きぬ魅力を感じ取るということにとほかならない。実は、その本文のことがぶかいが文語文であるのか、どうかの問題ではなく、再話されたものであれ、現代語訳されたものであれ、マンガ化されたものであれ、その作品のなかのことはや表現がいかに読者の生活や人生にかかわってくるのか、また再び繰り返しその作品を読んでみたいとおもうのかどうか、そのところが問われなければならない。しかしながら、現実には、わたしたちは教師は、どこかで、子どもたちに、ダイジェスト版ではなく、作品そのものを、原文にちいかかたちの古文や漢文そのものを読んでほしいと願っているし、読める力をつけたいと努力している。

三 古典教育はことば・日本語の教育

国語教育のなかの古典教育は、やはりことば・日本語の教育であるということにかわりはない。「難波津に咲くや木の花冬」ごもり今は春べと咲くや木の花」。これは、九〇五年成立の『古今集』の「仮名序」にひかれた歌

であり、百人一首カルタをはじめるときの歌い出しの歌である。これを注釈や参考書なくその意味を理解することはむずかしい。しかし、この歌にある「咲く」や「花」や「春」や「冬」は、いまもわたしたちがつかっていることば・日本語である。実は、国語教育のなかの古典教育が見落としてはならない点は、こうしたことばが日本語としていまも連綿として使い続けられているという事実である。語学教育的なアプローチ、文学教育的なアプローチ、読書教育的なアプローチがあるにせよ、わたしたちは、根本において、ことば・日本語の教育としての古典教育のありかたを探索して見る必要があるのではないだろうか。

ことば・表現は、つねに誰かに向けて差し出されている。古典文学作品のことば・表現もまた、時代をこえてたえずわたしたちにコミュニケーションを求めている。いまとは時代を異にする古典の世界にふれながら、わたしたちのコミュニケーション力・日本語力を豊かにしていく国語教育をめざしたい。

たなか としや 大阪教育大学准教授。現在、大学院実践学校教育専攻(夜間)で、現職の先生方と社会にひらかれた国語の授業づくりに取り組んでいる。